



よつば会だより

2023年8月号

発行:NPO法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

7月20日に気象庁が、山口県を除く中国地方と近畿・東海地方で「梅雨明けしたとみられる」と発表しました。今年の梅雨も線状降水帯が九州各地や秋田県などに停滞し、床下浸水の家に流れ込んだ泥土を、ボランティアの人たちが汗まみれになりながら運び出している風景を、テレビが映し出していました。幸いなことに尾道では被災のニュースが流れないままに梅雨明けを迎えました。いよいよ夏本番です。我が家の庭でもクマゼミのかまびすしい鳴き声が暑さをいや増していたのですが、ここ3年ほどは庭で鳴くクマゼミの声を聞くことがなくなりました。家の裏の空き地に大きな倉庫が建ち、緑がなくなりました。そのためにクマゼミが集団疎開をしたようです。



～第7期障害福祉計画に如何に生かしてもらえるか～ 尾道市のヒアリング調査に参加します



よつば会だよりでもお伝えしている、尾道市障害福祉係による、よつば会に対するヒアリング調査が7月31日に市役所で行われることになり、よつば会から3名の会員が参加します。このヒアリングは尾道市の第7期障害福祉計画を作成するために行われるものですが、よつば会としては障害福祉係と話し合ういい機会だととらえています。以前は何度か障害福祉係と話し合うこともありましたが、新型コロナウイルス感染騒動で当分途絶えていました。この機会を通して今後定期的に障害福祉係とよつば会が話し合う場を設定したいと考えています。ヒアリング調査の話し合いの状況は、よつば会だより9月号でお伝えします。



8月の家族教室は ～当事者にとって大きい支援のひとつ～ 「訪問看護について」の話し合いです



このところ第3日曜日に定着してきている「よつば会家族教室」を、8月も第3日曜日の20日に行います。会場はいつも通りの市民センターむかいしまの公民館研修室1で、13時30分開会です。今回は久しぶりに講師をお迎えしての開催です。家族教室に外部の方をお迎えして話を聞かせてもらうのは、平成31年1月に西川浩司さんに話してもらったのを最後に、新型コロナウイルス感染騒動で途絶えていましたが、騒動もかなり静まったことで、この度再開することにしました。話してもらうことは「訪問看護について」のもろもろです。講師の方は10年余り精神障害者の訪問看護に携わってこられた方です。この方は「研修会や講師などとの堅苦しいことは抜きにして、訪問看護について尋ねたいことがあれば出してもらって、それをもとに参加者全員で話し合う気楽な会話ができればいい」と言われているのですが、お迎えする側の気持ちとして「講師」とだけは使わせてもらうことにします。

これまで訪問看護を受けてきたことがある家庭もあると思います。その時によかったと思えることや、また、なぜか続かなかつたなどの体験談は、大いに参考になると思えます。そういう体験をお持ちの会員の方はぜひご参加ください。また、病気を抱えている当事者で自立に向けて何かを始めたいと考えている方がおられれば、参考になる話が聞けるのではないかと思います。

ここ当分家族教室に参加される方の顔ぶれも、いつも通りの少人数になってきていて、内容的にも新鮮さがなくなってきました。今回、講師の方をお迎えして、一味違った家族教室になるのではと期待しています。会員の方の多数のご参加をお待ちしています。会員以外の方が参加されてもかまいません。会員以外で訪問看護に関心を持っておられる方をご存知でしたら、会員の方から誘いをかけてみてください。

7月の活動報告

16日 よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)



8月の活動予定



20日(日) よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)

* 13:30より開始します



～家族が“それが当たり前になること”と願うのは～ 信頼できる医師に出会うことです



平成29年7月号の「みんなねっと」誌に、精神科医師、夏苺郁子さんが「みんなねっとフォーラム2016」で行った講演の内容が特集記事として掲載され、その記事の要旨を「よつば会だより同年8月号」の記事にしました。

とうとう6年も前のことを引っ張り出したのは、次のようないきさつからです。「サロンよつば」で雑談を交わしていたときに、ふと、「信頼できる医師に出会うことが、宝探しであってはいけない」という言葉が頭に浮かびました。しかし、そのときは、それが誰の言葉であったかも、前後関係がどういう流れの中で出されたのかも思い出せないままでした。思い出せないと気になるものです。家に帰ってあれこれと考えているうちに、ふと浮かんできたのが、その言葉が夏苺郁子さんのものではないかということと、私の頭の中にインプットされていたのは、よつば会だよりの記事にしたからではないかということでした。そこで、よつば会だよりを綴っているファイルをめくっていたら、ありました。平成29年8月号の二面に書いていた記事です。その記事のタイトルは「精神科医師は変わらないといけない」となっていました。そして、記事は「信頼できる医師に出会うことが、宝探しであっては決していけないと思っています」という夏苺さんの言葉で結んでありました。しかし、夏苺さんがどのような思いを含めて、この言葉を書かれたのかなどは一切なく、ただ、言葉だけが引用されていました。「引用された」と書きましたが、引用したのは私・谷口です。引用した時には私もいろんな意味を含めていたと思うのですが、6年前のことです。何も記憶に残っていません。そこで、この言葉に夏苺さんがどのような思いを含めているのかをとらえるために、冒頭の「みんなねっと」誌を読み返してみました。

特集記事は平成29年7月号から9月号の、それぞれ10ページ、全部で30ページにわたっていました。「みんなねっと」誌も夏苺さんの講演を大きく評価して30頁もの記事にしたのだと、改めて思いました。私は7月号の10ページを見て、すぐに「よつば会だより8月号」の記事にしたのですが、夏苺さんはもっと多くの問題提起をされていたのでした。しかし、30ページにも及ぶ内容をよつば会だよりでお伝えするのも難しかったのでしよう。今回も同様で、「信頼できる医師に出会うことが、宝探しであっては決していけないと思っています」という言葉のところにのみ触れていきます。この言葉を含めて、夏苺さんは次のように述べています。

「私はこの5年間全国を回って、たくさんのドクターに会いました。僻地や離島で地道な医療を続けられている無名の医師、ACT最前線の方々には大変感銘を受けました。でも、その一方で、大学や学界、何とか協会などの医師側の団体の頭の固さには、精神科医療を変えたいという私の思いを打ち砕きそうなくらい強いものでした。本当に心ある医師の中には、「学会なんか身を置いても何の変化も起こせない」と見切りをつけて、学会外で自分のやりたい医療をされる方もいらっしゃいます。私もそうした選択を考えたことがあります。でも、自分の手の届くところだけを変えるのではなくて、全国どこへ行っても心ある医師の診療を受けられるようにと、家族の一人、当事者の一人として願っています」

現在もこの夏苺さんの文章にある「信頼できる医師に出会った」という話はほとんど聞いたことがありません。心ある医師だと思えた医師が近くの精神科病院にいたこともあるのですが、短い期間の内に勤めていた病院を辞めてしまっています。多分病院の経営方針と合わなくて辞めていったのでしょう。残念ながら宝探しは当分続きそうです。(N.T)